多読を活用した聴き読み自主学習の検証

大阪樟蔭女子大学非常勤講師　片岡晴美

1.　はじめに

英語音声 CD を聞きながら多読本を読んでいく「聴き読み」形式を併用した多読（古川・伊藤 , 2005; 国際多読教育学会 , 2011; 高瀬 , 2010）は , 学習者が物語の内容や英語自体をより深く理解できるので学習効果が高いと報告されている（宮本 , 2013; 岡山 , 2014; 黛 , 2013）。しかしこれらの先行研究は, 授業中に CALL 教室等を使用してパソコンで音声を再生して聞く方法で, また多読にかける時間も 50 分～ 90 分である。本学では大学の学習規定に従い，90 分間の授業内での多読時間は 10 分間（片岡 , 2014）と定められているので，授業中に先行研究と同様の形式での多読の聴き読みを実施するのは困難である。

以前より，日本人英語学習者が英語を理解するには，(1) 英語の文字情報と (2) 音声情報の 2 つを理解することが重要である（門田 , 1998; 河野 , 1984; 羽鳥 , 1977; Palmer, 1921）と指摘されているため，音声を併用した多読学習活動は実施する意義があると考えた。また「大学設置基準」第 21 条には,「1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし」と規定されている（文部省 , 1956）。現状の 1 単位当たりの実際の授業時間を考慮すると，授業時間外に学生が自主学習する機会を設けることが望ましいと考えられる。

そこで 2014 年度の春学期に，授業時間外の英語学習活動として，各学生が図書館で英語音声 CD 付きの多読本を 1 冊借りて，自宅又は大学内の施設（PC ルームなど）で英語の音声 CD を聴きながら多読本を読み，簡単なコメントシートを記入して提出するという「聴き読み自主学習」を課題設定して実施した。

その結果,「英単語の読み方が分かるので良い」「音声があるので，物語の状況が分かりやすい」「自宅で，一人で落ち着いて聴き読みできるので，物語の内容に集中できた」「聴き読みしているうちに，主人公がかわいそうで涙が出てきた」などの記述があった。上記のように , この学習方法を支持す

る好意的な意見が複数見られたことから，やはり学習効果が高いのではないかと考えた。

そして 2014 年度の秋学期にも「聴き読み自主学習」を実施した。しかし，どの様な学習効果があるのか，また学生達はどの様に思っているのかという検証は先行研究では行われていない。

そこで本論では，この「聴き読み自主学習」について，学生達がどのように考えているのかに焦点を絞り，検証を行う。

2. 研究の概要

2.1 目的

授業時間外の英語学習活動として春学期に 1 冊，秋学期に 1 冊と課題設定して実施した「聴き読み自主学習」を学生達はどのように思っているのかを調査する。

2.2 参加者

参加者は 2014 年度に筆者が担当する Comprehensive English A/B/C/D を履修した 1 回生と 2 回生で，授業時間外の英語学習活動として「聴き読み自主学習」を行った 91 名である（表 1)。

表 1. 参加者

学年	1 回生		2 回生			
学科	児童	心理	児童	心理	被服	健康栄養
クラス名	CS2	PS1	CS4	PS1	CL5	FS2
人数	15	9	18	13	13	23

2.3 研究課題

先行研究 (宮本 , 2013; 岡山 , 2014; 黛 , 2013) では明らかにされていない内容を踏まえ，以下の研究課題を設定した。

①学生達は，授業時間外の英語学習活動として「聴き読み自主学習」をどのように思っているのか。

②今後の課題は何か。

2.4 調査方法

2014 年 12 月 8 日と 9 日に，量的研究法と質的研究法を合わせたミックス法 (Dörnyei, 2007) を用いた質問紙調査を実施した。項目 2 ～ 13 は，量的研究法である 5 件法 1 (竹内 , 2003, p. 254) の意識調査、そして項目 14 は自由記述の質的研究法を用いた。

3. 結果

項目 1 は，「聴き読み自主学習」をどこで行ったかについて調査した。その結果，自宅が 68 名（74.73％），学内の施設が 21 名（23.08％），その他が 2 名（2.20％）であったと分かった。

次に研究課題①を，項目 2 ～ 13 で調査した（表 2 と図 1）。

表 2. 項目 2 ～ 13: 5 件法調査結果

N = 91	項目	*M*	*SD*
2	「聴き読み自主学習」は、一人で落ち着いて多読ができるので、良かった。	3.71	0.98
3	「聴き読み自主学習」は、図書館で多くの多読本の中から自分が読みたい本を選べ、自分に本の選択権があるので良い。	3.54	1.11
4	自分が「聴き読み自主学習」した多読本を選んで、良かった。	3.69	1.02
5	自分が「聴き読み自主学習」した多読本は、面白かった。	3.74	0.93
6	英語音声を聞きながら多読本を読むと、本の内容が理解しやすかった。	3.54	1.00
7	英語音声を聞きながら多読本を読むのは、効果的な多読学習法だと思う。	3.69	1.05
8	英語音声を聞きながら多読本を読む学習活動を、授業中にも行いたい。	2.92	1.06
9	英語音声を聞きながら多読本を読むと、自分のペースで読めないので嫌だ。	3.14	1.03
10	英語音声を聞きながら多読本を読むと、感情や情緒面が分かるので良かった。	3.90	0.96
11	図書館に多読本を借りに行くのが面倒くさかった。	3.55	1.19
12	図書館を定期的に利用している。	2.54	1.44
13	今後も「聴き読み自主学習」を行う方が良い。	3.01	1.04

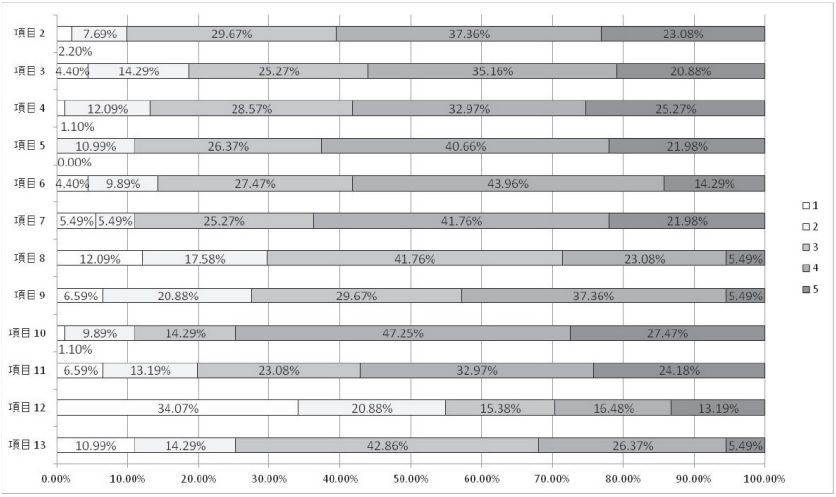

図 1.　質問紙調査（5 件法）結果

調査結果から，項目 10 の「英語音声を聞きながら多読本を読むと，感情や情緒面が分かるので良かった」が一番高く，そして項目 12 の「図書館を定期的に利用している」が一番低い数値であったと明らかとなった。

次に, 項目 10 について, 5 件法のスケール間に差が無いかを比較調査 (Field, 2009; Iimura, 2010) した。その結果，χ 2(4) = 58.73, p = .00, W = .16 で 2 回答に有意差が認められた。そして 5 件法で 5 を選んだ学生が 27.47%，4 が 47.25%で，5 と 4 の合計は 74.72%（図 1）であったことから，本研究に参加した 7 割以上の学生達は項目 10 の「英語音声を聞きながら多読本を読むと，感情や情緒面が分かるので良かった」と強く思っていることが明らかとなった。

そして項目 14 は，「あなたが『聴き読み自主学習』について思う事や，多読の学習活動についてやった方がいいと思う内容があれば，自由に記述して下さい」と設定し，質的研究の観点から自由記述調査を実施した。

その結果，91 名中 17 名（18.68%）が回答していた。そこで代表的な記述を，表 3 に示す。

表 3. 自由記述調査結果

n = 5	代表的な記述
学生 1	BGMがあるので背景が分かりやすい。
学生 2	まだ全然英語能力がともなっていなかったので外国人の人が読むスピードに追いつけなく理解して聞き取るのは難しかったです。
学生 3	聴き読みすることで、分からない単語の発音の仕方が分かったなと思いました。
学生 4	聴き読みすることによって、発音が分からない単語があっても聞けるので良かった。自分で読むのでスムーズに読めた。
学生 5	聴き読み自主学習では、発音もわかりやすいので、すごく良いと思います。

自由記述調査からは，(1) 音声があるので英単語や物語の背景が分かりやすい，(2) 学生のリスニング能力や，その学生が選択した多読本の難易度によっては, 音声が早すぎて多読本の内容の理解が難しくなる, の 2 点が分かった。

4. まとめと今後の課題

研究課題①について，項目 10 の結果から学生達は音声 CD を聞きながら多読本を読むのは感情や情緒面が分かるのでよかった，と思っていることが明らかになった。ただし，授業中に多読を用いた聴き読みを行いたいのかというと，項目 2 や項目 8 の結果から，授業中に行うことはあまり望んでおらず，授業時間外に一人で落ち着いた環境の中で実施したいと望んでいることが明らかとなった。そこで，今後も授業時間外に行う聴き読み自主学習を実施していきたい。

次に研究課題②の「今後の課題」については，項目 12「図書館を定期的に利用している」の結果が一番低かったことから，読書の基本となる図書館の利用の習慣がついていないことが挙げられる。図書館では利用者が自主的に本を選択する作業が必要なのだが，今回の聴き読み自主学習において，自分が読む多読本の選択が上手く出来ず，難易度が高い多読本を選択した学生がいた（表 3 の学生 2 参照）。そこでこれからは，教員が図書館を利用する

機会を増やす授業計画を作成することや，実際に学生が図書館から借りてきたその多読本を読む前に，物語の内容や学生の英語レベルを考慮して，事前にアドバイスを行う機会を作ることが必要である。

今後は，授業内外で学生が多読本を選択する自由を尊重しながら，本学の学生に最適だと思われる授業時間外の聴き読み自主学習を継続して実施したいと考えている。

注

1. 5 件法のスケールは、竹内 (2003, p. 254) を参考に以下のように設定し，本調査に用いた。
5 = そう思う (ほぼ 100%)，4 = ややそう思う (75%程度)，3 = どちらともいえない (ほぼ 50%)，2 = あまりそうは思わない (25%程度)，1 = そうは思わない (ほぼ 0%)
2. Field (2009, p. 576) によると，Kendall's W（W とも表記される）は，一項目に関する 2 以上のカテゴリーを分析の対象とし, 評定者間の一致度を表す。本研究では一項目を対象に, 1 ～ 5 の 5 件法（＝ 5 カテゴリー）で調査した為, Kendall's W を統計分析手法に採用した。なお W は, 0 ～ 1 の範囲で表される。そして日本における英語教育学の論文の多くで採用されている APA の書式での小数点の表記法 (American Psychological Association, 2009, p. 113) に従い, 1 を超えることのない統計量に関しては，小数点の前に 0 を付さないで表記した。

参考文献

American Psychological Association. (2009). *Publication manual of the American Psychological Association* (6th ed.). Washington, DC: American Psychological Association.（アメリカ心理学会（著）　前田樹海・江藤裕之・田中建彦（訳）(2011).『APA 論文作成マニュアル　第 2 版』東京：医学書院)

Dörnyei, Z. (2007). *Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies.* Oxford: Oxford University Press.

Field, A. (2009). *Discovering statistics using SPSS.* London: Sage.

古川昭夫・伊藤晶子 (2005).『100 万語多読入門』東京：コスモピア .

羽鳥博愛 (1977).『英語授業の心理学』東京 : 大修館書店 .

Iimura, H. (2010). Factors affecting listening performance on multiple-choice tests: The effects of stem/option preview and text characteristics. *Language Education & Technology,* 47, pp. 17–36.

門田修平 (1998).「英単語の視覚認知における音韻の役割−心理言語学的分析−」 小西先生傘寿記念論文集編集委員会(編)『現代英語の語法と文法:小西友七先生傘寿記念論文集』東京：大修館書店．pp. 317–325.

片岡晴美 (2014).「多読の実践と効果に関する一考察」『樟蔭学園　英語教育センターフォーラム』第 3 号 , pp. 8–16.

河野守夫 (1984).『英語授業の改造』東京：東京書籍 .

国際多読教育学会（著）山中順子・高瀬敦子・古川昭夫（訳）　(2011).『国際多読教育学会による多読指導ガイド』
http://erfoundation.org/wordpress/useful-resources

宮本恵理子 (2013).「公立高校での多読指導」日本多読学会
第 6 回関西多読指導新人セミナー .

岡山陽子 (2014).「大学での多聴・多読授業について」日本
多読学会 第 7 回関西多読指導新人セミナー .

文部省 (1956).「大学設置基準」（昭和三十一年十月二十二日文部省令第二十八号）
http://www.lawdata.org/law/htmldata/S31/S31F03501000028.html

Palmer, H. E. (1991 [1921]). The principles of language study. In the Institute for Research in Language Teaching (Ed.), *The selected writings of Harold E. Palmer: Pāmā senshū, Dai 1 Kan,* pp. 331–520. Tokyo: Hon-no Tomosha.

黛　道子 (2013).「多読図書のコーディネート : やさしく、楽しく」日本多読学会　第 6 回関西多読新人セミナー .

高瀬敦子 (2010).『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店 .

竹内　理 (2003).『より良い外国語学習法を求めて』東京：松柏社 .